



太田尚樹さん

(作家・東海大学名誉教授)

おおた・なおき 1941年東京生まれ。専門はスペイン文明史、比較文明論。スペインに関する著作のほか、昭和史をテーマにしたノンフィクションでも活躍する。著書に『ヨーロッパに消えたサムライたち』（ちくま文庫）、「駐日米国大使ジョセフ・グルーの昭和史」（PHP研究所）など多数。小誌に「コルドバ歳時記への旅」を連載中。



『支倉常長遣欧使節
もうひとつの遺産』
山川出版社 1,600円

BOOKS

スペイン・アンダルシアの都セビリアから十二キロほどの、人口二万八千人の町コリア・デル・リオ。ここに「ハボン（日本）」という姓を名乗り、サムライの子孫であることを誇りにする約八百人のスペイン人がいる。彼らがルーツと信じるのは、四百年前に仙台藩の伊達政宗が派遣した支倉常長遣欧使節団だ。本書は、未裔伝説のミステリーとハボン姓の人々の素顔に迫った一冊である。

——太田先生が、ハボン姓の人々と交流をもったきっかけは二十四年前。ご専門の農業経済史の調査旅行がきっかけでした。

十二世紀にアラビア語で『古農書』を書いたイブン・アワムの記述と、現代スペイン農業との比較調査を続ける途中のことでした。セビリア郊外の村のバール（居酒屋）の主人が見せてくれた新聞に、「大航海時代の歴史がもたらした意外なミステリー、いまベールを

脱ぐ」という見出しで、ハボン姓の人々のことが紹介されていました。一九八九年夏のことです。

その数カ月前にも、セビリアの花祭りに来ていたハボン姓の娘から、「私の先祖は日本のサムライなのです」と言われて目を白黒させたばかりだったので、この伝説に自分がぐいぐいと惹かれていたのを感じました。

ダイレクトに「何かがある」と感じたのも、農業調査を通じてで

BOOKS

した。通常、スペイン南部の稲作は沼地に籾を直接蒔き、二毛作で米作りをするのですが、コリア・デル・リオの隣町では、あぜ道で仕切られた水田が並び、堰き止めた川の水が田に引かれていました。聞けば、伝統的にこの地では育苗した苗を手で植えていたと言います。そして一毛作です。日本の田園を見ているようでした。この町にもハボン姓の人が二百人ほど暮らしていました。

その後、「自分たちのルーツはスペインに残ったサムライだ」という説の検証を続ける、ハボン姓の二人の郷土史家に出会ったこともあり、この歴史のミステリーにも、この歴史のミステリーに挑んでみようと思いました。最初の成果として一九九九年に刊行したのが、『ヨーロッパに消えたサムライたち』です。

——支倉使節団はイスパニア国王やローマ教皇との謁見に成功した一方、通商交渉には失敗して帰国した、というのが歴史上の一般的な評価です。使節団の足取りを追う中で何が覚えてきましたか。

使節団に出会ったヨーロッパの人々の記録から浮かんでくるのは、異文化社会の中で言葉が通じずとも、人柄や潔い態度、サムライの礼儀作法で、ローマやイスパニアの高官たちを魅了した支倉常長と一行の姿です。これは、スペインの人々が日本人やサムライに対して思い浮かべるイメージの原点にあるといえるものです。

渡欧した二十六人のうち、乗船名簿などから浮かび上がった残留者は九人。ハボン姓の郷土史家らも、この九人のうちの誰かが先祖のサムライだと考え、それを信じ

ています。

——使節団の日本出航から四百年目の今年、日本の皇太子がコリア・デル・リオを訪問しました。使節団の関係史料がユネスコの世界記憶遺産に登録され、日本の共同研究班が血縁関係を調べるDNA調査が開始されました。

ハボン姓の人々は、現在も小さな町と周辺を離れずに暮らしていて、スペイン人には珍しく華美を好まず、教育熱心。州政府の役人、大学教員、医師、農業者といった立場で地元に貢献する人が多い。日本の震災や原発事故に心を痛め、会いに行けば、「サモス・ハポネセス！（私たちは日本人だ）」と温かく迎えてくれる人々です。

DNA鑑定は、この歴史の謎にどんな評価を下すのか。期待しているところ です。